《　神聖かまってちゃん好きを言えない。／ 岡田斗司夫は「才能とは、」／甲本ヒロトも草野マサムネも峯田和伸も楽曲のなかで「ナイフ」というワード／“神聖かまってちゃん”はロマンを描き始めた／ボーカロイド望感が漂っている／／／／ロックって何／　》

神聖かまってちゃんと高浜虚子
ーーー音楽なんていらない、に対する正しい論

《人によると、花鳥諷詠(かちょうふうえい)は閑事業である、そんなことをしている暇があるならば、もっとほかになすべきことがある、苦しい人生を逃避しようとしていたずらに易きにつくものである、もっと苦しまねばならぬ、若くして老人の真似をしてはならぬ、というものがありますが、それは一を知って二を知らぬ言であります。》
高浜虚子

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。
今回は、「高浜虚子」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんと高浜虚子（詩人）

音楽なんていらない、に対する正しい論

「“ロック”と親に言ってもまったく分かってくれません。高橋ジョージとか、矢沢永吉か？といって来る始末です。私は音が激しいからロックというわけではないし、不良っぽさがあるからロックというわけでもないし、そういうものではないと思うのです。親にはどう伝えたら分かってくれるんでしょうか？」

先日とあるラジオを聴いていたらDJにそんな悩める女子高生の質問があった。
ふむふむ、たしかに、これはわれわれのような人間が必ず突きあたる問題である。↓

わたしも、スピッツやミスターチルドレンを好みそうな内向的な風貌ゆえ、「夜ライブ見て来るし夜遅くなるから」と告げると、親からは「え、あんたが？納豆好きなのに？」といわれてしまう。いや、納豆好きは関係ないだろ。

普通にテレビで流れるポピュラーミュージックを受動してきた五〇歳代の親は、こんな感じである。ライブやロックといえば不良・酒・ドラッグというイメージがこびり付いているらしい。ちなみに、歌謡曲やフォークやニューミュージックを経てきた世代なのでライブをコンサートという言葉に置き換えるとすこし安心するようだ。

音楽に詳しくない人間にロックを説明しても理解してもらうのは↓

　音楽に詳しくない人間にロックを説明しても理解してもらうのは非常にむずかしい。また、音楽を趣向してきた人間でもポピュラーミュージックしか聴いていなかったのならわれわれのロック感は分からないだろう。うーむ、、、、この問題は非常に根深い。

ライブってそんな不良のたまり場じゃないから！と、わたしはよく訴える。しかしながら、↓

ライブってそんな不良のたまり場じゃないから！と、わたしはよく訴える。しかしながら、ミュージシャンのインタビューや伝記、いろいろな書物を読んでいると、どうやら親世代が抱いてるイメージはあながち間違っていないことが分かってきた。

八〇年代にはライブハウスへ行くと本当に肩にトゲをつけた屈強な男がいたらしいし、たばこのモヤは通常装備、ステージに出てくるミュージシャンを罵倒する野次はかなりある、そしてまあ本当にガラが悪い、そういうところだったようだ。

いまでも語り継がれるスターリンの豚の臓物を

いまでも語り継がれるスターリンの豚の臓物をフロアにバラまいた話。

ライブハウス『ロフト』の立ち上げ人の伝記を読んでたらこのような記述があった、「ハードコアバンドで一番恐怖を感じさせ破壊的だったのは非常階段でもスターリンでもじゃがたらでもなく、タコの山崎春美と香山リカによる“自殺未遂ギグ”だろう。」 なんだそれは。どうやら自らの身体を刃物でザクザクと切りつけて、危ないところまでいくと香山リカが止めに入るという内容らしい。恐ろしすぎるぞ。というか、なんで香山リカが出てくるんだよ！

九〇年代頃になってもそれはまだ続いていた。早稲田大学の文化祭でノイズで有名な『非常階段』が呼ばれたとき、ライブの最中に突然大学中の窓ガラスをガンガン割っていったという。ライブハウスでならまだしも、出張先でそれをやるのが驚きである。

うーむ。ロックは怖いという印象をもったとしてもこれでは仕方ない↓

うーむ。ロックは怖いという印象をもったとしてもこれでは仕方ない。あるミュージシャンがヤクザをするかロックをするかどちらか迷ったという逸話があるほどだ。それは怖いよ！ヤンキー怖い怖い！と思ってしまう。しかし反面かなり共感してしまう。ヤンキーではなくても内向的な人間も狂気はもっているからだ。

例えば、甲本ヒロトも草野マサムネも峯田和伸も楽曲のなかで「ナイフ」というワードを出している。↓

例えば、甲本ヒロトも草野マサムネも峯田和伸も楽曲のなかで「ナイフ」というワードを出している。それは不良やヤンキーの象徴ではなく、内向的な少年がもつどこにもぶつけどころが見つからない衝動の象徴として描かれている。

文化系も人を殺すような鋭い感情を内包しているということだ。だから文化系なミュージシャンは「ロックをやってなかったら犯罪者になってたかもね」、とかいうんだと思う。ロックリスナーも、きっと彼らロックバンドに出会ってなかったら人を刺してたかもしれないという、ギリギリの人間はきっと少なくない。

先に書いたあの女子高生の質問に答えるとするならば、理解してもらうのは不可能なのであきらめましょう！↓

先に書いたあの女子高生の質問に答えるとするならば、理解してもらうのは不可能なのであきらめましょう！

ロックンロールはロックンロールを受け取った人間にしか分からない感覚なので、それをもっていない人とは分かり合えないのである。我々はロックという言語を手にいれてしまった希少な存在だ。例えば、ロックが分かる親しい友人と会話したなら「わたし、ベースボールベアーとアジカンと銀杏BOYZが好きなんだよね、バラバラだよね」「よし、おまえはイースタンユースを聴け！」と、その五秒間に謎の共通見解が発動しているはずだ。なぜイースタンになるかは分かる人間にしか分からない。しかし、分かる人間には分かる。

ガイナックスの元社長である岡田斗司夫は「才能とは、何かが人より上手く出来ることではなく、↓

ガイナックスの元社長である岡田斗司夫は「才能とは、何かが人より上手く出来ることではなく、分かること」といっていた。これは、車の種類が分かる人間は車の才能があるし、ガンダムの名前が分かる人間はガンダムの才能があるということだ。例えば、わたしは、車をみても全く名前が分からないし、教えられても覚えていられない。これは普通に名前が分かる人からすればバカ扱いされるけど、車にまったく興味が無いわたしからすると、車の名前が分かる人はすごいなと思う。つまり、分かる・興味があるは才能なのだ。

だから、分からないというのは才能がないのだから理解されないのは仕方ない！と考えよう。話し合えば分かり合えるなんてウソっぱちである。そもそも周りと分かり合えなくて、ロックを聴いたらロックだけが分かり合える相手だったからきみはロックを趣向しているのではないのか。

わたしは神聖かまってちゃんが↓

　わたしは神聖かまってちゃんが大好きだ。でも彼らを好きということは周りには言えない。たとえいったとして、知らないと言われたら説明するのはしんどいし、どこが良いのか分からないと言われたら
「そうだよね、やっぱ分からないよね」と思って傷つくし、知ってる！知ってる！良いよね！と言われたら「おまえに神聖かまってちゃんの何がわかるんだよ！」と怒りが沸き起こってしまう。分かったような気になって軽々しく好きって言われたくないそんな気持ちなのだ。

詩人の高浜虚子だ。彼はエッセイ「俳句への道」でこう語っている。↓

このままでは得るものがないので、少しちがった形で回答を考えてみる。

親に理解されたいと思っているということは、ロックによって親とすぐ解決しなければいけない何らかの溝ができていて、質問者の女の子はそれを埋めたいと考えていると思われる。きっと、親からがみがみとロックを趣向していることについて言われているのだと思う。親なんてものは、他人に自慢できるようなアカデミックなものが大好きなのであって、それ以外の子の生活の身にならないものについて批判的なものだ。

ロックは「人生において何の身にならないつまらない遊び」という親が抱いているマイナスイメージを変えていくことを考えてみる。そのことでわたしが真っ先に浮かぶのは詩人の高浜虚子だ。彼はエッセイ「俳句への道」でこう語っている。↓

《人によると、花鳥諷詠(かちょうふうえい)は閑事業である、そんなことをしている暇があるならば、もっとほかになすべきことがある、苦しい人生を逃避しようとしていたずらに易きにつくものである、もっと苦しまねばならぬ、若くして老人の真似をしてはならぬ、というものがありますが、それは一を知って二を知らぬ言であります。》
↓

花鳥諷詠とは、四季の移り変わりによる自然界や人間界のあらゆる現象を、そのまま客観的にうたうべきであるとする俳句理念のことである。

高浜虚子は詩を書かいて読むこと（詩人）が世間からいい目で見られていないことをいっている。どうやらいつの時代も表現というのは下にみられるものらしい。ここでの花鳥諷詠（詩）はロックと置きかえることができる。

そこで虚子は、↓

そこで虚子は、原始生活から文明化がすすんだ人間の余裕が花鳥諷詠であるといった。魚が泳いでいればすぐに漁獲、鳥が飛んでいればすぐに狩猟、樹木があればすぐに伐採しようとすればそれはあわれむべき人間である。汗ばかり流すのが人間ではなく、涼風を満喫するのも人間だ、といっている。

さらに最後にこう続けてる。↓

詩を否定するなら人間を否定することになるぞ、と虚子はいっているのだ。衣食住は人にとってたしかに最重要だが、詩を軽視して生命活動以外を楽しむことを否定するならそれはただの動物ということだろう。

ロックも俗にいらないものといわれるが、それはだれかが決めるものではないだろう。↓

ロックも俗にいらないものといわれるが、それはだれかが決めるものではないだろう。ましてや、ロックを分からない人間がそれをいうなんてもってのほかである。
表現があるから生きられるということもある。例えば、神聖かまってちゃんの楽曲『夕方のピアノ』では「死ね」という言葉がの子の絶叫とともに何度も何度も聞こえてくる。
多くの人は眉をひそめるだろうが、わたしはこれを聴いたとき生きる活力が生まれた。
そんな言葉で救われる人もいるのだ。

『明日、ママがいない』もどうにかならなかったのだろうか←

奥付

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88801

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ